

國學院大學学術情報リポジトリ

- ・ 第1回 萩原 稔氏「井上正鐵門中・禊教と国学」概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000570

令和元年度第1回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 荻原稔氏「井上正鐵門中・禊教と国学」概要

2019年度第1回国学研究プラットフォーム公開レクチャーは、井上正鐵研究の第一人者である荻原稔氏を招き、「井上正鐵門中・禊教と国学」というテーマで講演を賜った。

まず、司会の齋藤公太氏により本レクチャーの概要や荻原氏の経歴について説明がなされた。続いて本プロジェクト代表の松本久史が挨拶をおこない、本プロジェクトが様々な視点からの実証的な国学研究を目指している旨について紹介がされた。

荻原氏からは、

- ① 井上正鐵門中の行法と教説の概略
- ② 『神祇伯家学則』をめぐる気吹舎との
かかわり

という二つのテーマについて発表がなされた。

①井上正鐵門中の行法と教説の概略について、最初に井上正鐵の略歴や正鐵門中の道統や教会の系統についての説明があり、その後は禊教諸教会における現行の行法が、荻原氏の実演を以って紹介された。

最初に、唯一神道禊教（足立区）の「四つ祓」が実演された。「四つ祓」では、鈴の音を合図に「永世の伝」という無声の呼吸を数回おこなった後、「しゃく」という薄手の拍子木のリードで「禊祓詞」を唱える。その後、鈴を振る音に合わせて「とほかみえみため」の「三種祓詞」が唱えるのであるが、「とほかみえみため」の八音を唱える間に鈴を振る回数は八声→四声→二声と変化していくという。

次に、一九会道場（東久留米市）の「五つ祓」が実演された。最初の「永世の伝」は拍子木の合図でおこなわれ、続いて拍子木に合わせて「禊祓詞」が唱えられる。その後も同じく「三

種祓詞」が唱えられるのであるが、唯一神道禊教の場合と異なり、鈴を振る回数は八声→五声→二声という変化をするという。

続いて、膝で打ち鳴らす「おさ棒」と鈴を用いる神道禊教（中央区）の祓行の一部が披露された後、天台宗の講社である浄信講社の高声念仏について説明がされた。安政初年、葛飾の浄光寺の住職を務めていた但唱が正鐵門中の三浦知善の下で門中に入門すると、行法を仏教化して教化活動にあたった。それが深大寺やその末寺に伝わり、川崎市の西蔵寺住職の入亮伝により明治期に結成されたのが浄信講社であるという。この高唱念仏では、白木の木魚に「ばい」という棒を打ちつけて音頭をとりつつ念仏を唱えるという形をとっており、こちらも荻原氏により実演がされた。浄信講社の高声念仏の一部は、いすみ市の真福寺や川崎市の幸福寺にて現在も行われており、仏教の行法ではあるものの、基本構造は唯一神道禊教や一九会道場のものとほぼ同じであるという解説がなされた。

以上の行法は集団でおこなうものであったが、続いて指導者が修行者に対し一定の境地に達したと判断した場合に内陣（奥殿）にておこなう伝授についての説明がなされた。ここでの伝授の方法は「産霊の伝」と呼ばれ、弘化2年に井上正鐵が門中に指導体制を指示するにあたり、三箇条、すなわち「神水の事」「喜悟信の事」「法止の伝の式」が制定されたという。

「神水の事」とは、神水の調製方法についての伝授であり、その伝書は伝の本文と製水の具体的な作法を記した「神水製法式」から

構成されている。正鐵は水を宇宙の根源と考えており、器に水を入れて『日本書紀』神代巻を唱えながらかきまぜることで、宇宙の誕生から現在までを象徴しているという。

「喜悟信の事」は、修行者への信心伝授の時期を判断する基準についての伝授である。修行者のなかで「喜心（喜びの表情になったり顔を紅潮させたりしている状態）」や「悟心（溜息や片身に汗を流している状態）」を起こした者が出た場合、時を置かずに信心を伝授させるべき旨が記されているという。

その信心伝授の作法を説いているのが「法止の伝の式」である。内陣において、修行者は「息吹」という無声の深呼吸の行に取り組むのだが、これは指導者の「天津祝詞太祝詞言を宣れ」という指導者の合図の後におこなわれるという。文政9年、正鐵37歳の時の旅日記には同行者に念仏を指導した旨が記されており、翌10年には父から「天津祝詞之太祝詞事」の研究をせよとの遺言を受けていた。その後天保4年には、「甘露女」という神女により迷いの心を覚ます明玉を口に投げ入れられるという神夢を感じたが、萩原氏によると、これは正鐵が念仏の行法と祝詞の研究との統合を確信した結果であるとしている。すなわち正鐵の行は、罪を祓う天津祝詞太祝詞言を古典の特定の文言ではなく全ての人間が持つ「息」であると理解することで、知的な理解に依らない行法体系を確立したという。

そして正鐵は同年秋に、ていせうという未詳の女性念仏導師から教師となるよう伝授を受けて指導者となり、翌5年には白川家に入門した。さらに同7年には「江戸御門人」という立場で京都の白川家に参殿し、伯王に面会、神拜式を授かったという。これを踏まえ、②『神祇伯家学則』をめぐる気吹舎とのかかわりについて説明がなされた。

最初に、『神祇伯家学則』執筆の経過が示された。天保13年、正鐵は寺社奉行に対し、日頃の教導の趣についての釈明の書面として

『唯一問答書』を執筆、提出した。その同年、白川家関東執役南大路左兵衛から平田鋲胤に、寺社奉行への下問への上言書の執筆が依頼された。すると平田鋲胤が上言書の執筆に意欲を燃やし、秋田において「伯家御口授」として執筆、同14年正月に書き上げて江戸に送ったという。

この『神祇伯家学則』は、文化13年に白川資延王の口述を門人が筆記した体裁に仮託した偽書である。この作成にどれほど白川家の関与があるかは未詳であるものの、萩原氏によると『白川家日記』天保13年12月7日条には「執役所よりも、先頃来毎々文通」とあることから、白川家内において了解はされていたと推定できるという。しかし、同13年12月中に正鐵は口書（調書）に署名をし、12月27日には遠島の指示があったため、『神祇伯家学則』が正鐵の処遇に影響する余地や当時の史料も言及されるはずもなく、本書は正鐵の新義異流一件に関わる副産物であったと結論づけた。

また萩原氏は今後の課題として、明治期以降の教学や行の形成に国学がどのように関わっていったのかについて、特に大武知康に注目しながら検討していきたい旨が述べられた。また、近代以降の教派神道の民衆教化の実態についても関心があることが挙げられた。

質疑応答の時間には参加者より、禊教の「三種祓詞」^{さんしゅ}に対して宮中祭祀では「三種祓」^{みくさ}と読む例があることを示し、禊教において「三種」^{さんしゅ}と読むようになった時期について質問が出された。萩原氏はこれについて、『唯一問答書』の最古の写本である万延元年のものには既に「三種」^{さんしゅ}との読みが付されている例を紹介し、正鐵は宮中祭祀の語をそのまま使うつもりはなく、また白川家の家職を侵害しているとの疑惑を持たれないようにした可能性もあると答えた。

（武田幸也・鈴木健多郎）